

5 年 2 組

 わたしたちの暮らす環境に目を向けて
～大池復活プロジェクト～


みんなが遊べる大池に戻ってほしい

11月に中核活動を見直し、4月に構想していた『大池』に原点回帰しました。実際に大池の水を抜き始めた子どもたちに、「ねえねえ、何しているの?」と、2年生の子どもたちが話掛けている場面に出会いました。

Aさん：「みんなが遊べる大池にしているんだよ」

Bさん：「今はね、水を抜いているの。危ないから入らないでね」

5年生2人が受け答えをする姿を見ていて、あらためて長野小学校の中核活動について私自身子どもたちに教えてもらったような気がします。長野小学校の魅力の一つは「うちのクラスはこういうことをやっている」ということを子どもたち一人一人が自信をもって語れるところ。そして、お互いに認め合えるところだと私は思っています。今、泥にまみれながら排水作業をし、「くさいー!」と言いつつも必死にバケツを運ぶ子どもたちの姿に、「みんなが遊べる大池に戻ってほしい」という願いを感じます。

「大池の水を抜くなら、全校のみんなにちゃんと説明しないとイケない。」という国語的な要素に気づく子ども。「水を抜きながら生き物をちゃんと逃がしてあげたい」という道徳的な要素を言う子ども。「その生き物から生態系が分かるんじゃない?」とい理科的な要素や「どうして大池を作ったんだろう」という社会的な要素、「大池に入れない人は、橋を設計するのもいいね」と図工的な要素と、子どもたちの気づきは様々です。中核活動がまるでサイコロのように、面を変えるといろいろな教科の要素に見えてくる。一段と寒さが増した12月初旬。子どもたちと願いをともにしながら、活動をしてきました。

大池の底を見よう！

「年内に大池の底を見よう!」と、12月いっぱい活動を進めてきました。全校に大池の水を抜くことを伝え、質問や意見を受け付けました。大池に住む生き物を教室に移動させ、そこからはヘドロと落ち葉との戦いでした。そして、とうとう大池の底が見えました。丁寧に泥を取り、ブラシを使って汚れを落としていく子どもたち。作業を始める前の大池（右横の写真）が、子どもたちのがんばりで、底が見えるほどになりました。（写真左下と右下）





大池復活プロジェクトの活動の様子



大池のことを進めていくと、見えてくるのは水のことです。「この水はどこから来るのかな」と用水路を気にし始めた子どももいました。大池に入れる水の水質やどこから来ているのか、用水路の環境へも意識を向け始めていました。これからの季節は、雪が降り積もっていきます。大池に架かる橋の修理依頼が子どもたちに届いています。大池をきれいにするだけではなく、橋を直していくなど、私たちの生活する環境に目を向けながら、求められている声に応え、自分たちの手で環境を整えていくことに挑戦していきます。4月にはみんなが楽しめる大池が復活することを目指しています。



